Osaka Museum of History

大阪歴史博物館
友の会だより

平成17年3月・準備号　No.2

（平成17年3月撮影）

大阪歴史博物館では、2月23日から特別展「阪神タイガース展」がはじまりました。展覧会の開会式では、「六甲おろし」が演奏され、甲子園球場でおなじみのロケット風船が飛ばされるなど、ふだんとは違った趣向がこらされました。

この展覧会も含め、博物館と友の会では、本格的な春到来に向けてさまざまな行事が予定されており、たいへんにぎやかなシーズンを迎えています。4月からはじまる新しい年度も、博物館・友の会の活動にどしどしご参加ください。

（友の会事務局）

特別展 タイガース展

船越幹央

阪神タイガースは、平成17年（2005）、球団創立70周年を迎えました。当館では、その節目の年に、多くのファンに愛され続けてきたタイガースの歩みを振り返ります。

展示は、〈第Ⅰ部 "聖地"甲子園〉〈第Ⅱ部 タイガース激闘史〉〈第Ⅲ部 甲子園スケッチ〉の3部で構成されます。第Ⅰ部と第Ⅲ部で甲子園球場の歴史と現状を紹介し、第Ⅱ部では過去の名選手や名場面を紹介していきます。

特に、第Ⅱ部は〈1.大阪タイガース誕生〉〈2.ダイナマイト打線〉〈3.2度のリーグ優勝〉〈4.苦闘の時代〉〈5.日本シリーズ初制覇〉〈6.猛虎新時代へ〉の6つの時期に分けて取り上げています。

展示品は、選手が使ったユニフォーム、グラブ、バットなどの野球用具、タイトル獲得時の記念品、優勝トロフィーやペナント、球団が作った懐かしいポスター、各種の野球雑誌、「大阪タイガースの歌」（"六甲おろし"）の古関裕而自筆の楽譜、キャンプ地・安芸に関する資料などで、ゆかりの品々を一堂に集めて展示しています。

また、映像で歴史を振り返るコーナーもあり、戦前の名選手の勇姿から星野タイガースの優勝まで、ふだん見られない映像も織り交ぜて上映しています。

この機会に、ご家族・お友達お誘い合わせのうえ、ぜひご観覧ください。　（博物館学芸員）

活動の記録

堺市立博物館企画展の見学会

豆谷浩之

今年度1年間かけて行ってきた「大和川付け替え300年シリーズ」の締めくくりとして、今年1月23日（日）に堺市立博物館で開催中の企画展「堺と新大和川」を見学しました。当日は寒い気候にも関わらず、27人の会員が参加されました。博物館では、学芸員の矢内一磨さんに展示解説をお願いしました。数々の展示資料の中でも、特に亀の瀬から河口までを描いた「大和川絵図」の展示が圧巻でした。その後、矢内さんによるミニ講演会を聞き、見学したばかりの絵図についてさらに学習を深めました。実はこの日、矢内さんはお休みの日だったのですが、無理をお願いして今回の講師を引き受けていただきました。あらためて感謝の意を表したいと思います。

今年度は全部で8回の大和川シリーズを行いました。参加者の多くは複数の見学会に参加され、中にはほとんど全てに参加した会員もいらっしゃいました。これからも地元大阪の歴史の節目に、こうした企画を持っていければと思います。　（博物館学芸員・友の会事務局）

井真成墓誌をめぐって

村元健一

昨年10月に中国西安市で発見された「井真成」の墓誌は、日本でも大々的に報道されました。「唐で官職につきながらも、不慮の死を遂げ、皇帝に惜しまれながら葬られた」と報じられ、「第2の阿倍仲麻呂か」という見出しが紙面に躍りました。反響も大きく、その後、講演会やシンポジウムが各地で開催されています。

将来への夢を抱きながら、荒海を乗り越え、長年、唐の都・長安で学びながら、志半ばで死亡した井真成の生涯については、確かに学問的関心以上に、心動かされるものがあります。先の「第2の?」という新聞の見出しも心情的には理解できないものではありません。

しかし、虚心に墓誌を読むと、全く異なる井真成像が浮かび上がります。墓誌の表題に相当する部分に「大唐」と書かれていないこと、本文中に具体的な官歴がないことから、井真成が唐で官に就かなかったことは明白です。また、皇帝が哀悼し、国費で葬ったという記載も、墓誌の常套句や唐の規則を記したにすぎません。

この墓誌から浮かびあがるのは、唐が外国の使節の扱いに気を使い、そのための制度を整備していたということでしょう。この墓誌を理解するには、まず唐という国と、その制度、そして墓誌とはどういうものかということを知っておく必要があるのです。

それはともかく、あまり井真成を過大に評価することは、過った歴史認識につながります。何より、井真成自身が面映く思っているのではないでしょうか。

（博物館学芸員）

※2月12日に行った「古代史講座」のダイジェストです。

コミ知識 「国号・日本」について

児見山　繁

平成16年10月、マスコミ報道によれば、西暦717年（養老元年・開元五年）19歳の遣唐留学生の一人であった「井　真成」が、西暦734年（天平六年・開元22年）正月に、36歳で中国西安市付近で、客死した。

この、「井　真成」の墓地から、墓誌が出土し、その墓誌に「国号　日本」と刻されていた、ことが判明した。

この「国号　日本」は当時（717～734年）どういう呼び方であったのでしょうか。ニホン・ニッポン・ヒノモト・ヤマト・ワ等々考えられます。

「続日本紀」によれば「ヤモト」と呼んでいたものと推察します。では、「倭国」から「日本」へはいつ頃、変更になったのでしょうか。よく検討しなければなりませんが、多分、西暦702年から704年の間に、遣唐使が中国へ行き、「国号　日本」を、承認してもらったのではないか、と思います。（友の会幹事）

会員のページ

友の会会報には、会員の方からの投稿を載せてゆこうと考えています。
今回は友の会幹事からの投稿２題を掲載します。

私、去る事十年余り前の事、姉の家で新築祝いの慶事があり、お祝いに行った所、通された座敷の床の間に、無我の掛物が掛けてあった。無知な私がその画がその時は誰の絵かも分らず、なんでこんな子供の絵がよいのかなと感動すらなく観ていました。

その後刺繍が好きでどうしても習得したく学院へ通うようになり、色々と本を読み又優れた人々の絵画を、催し物をとあさり歩いている内に、あの絵が横山大観画伯のものだと分り知らぬが仏、無恥な私、はづかしさがこの時にやって来ました。無心の赤児として生まれてきた私でも今この時、人生のむつかしさを深く述懐しています。

無、これ程むつかしいものは無い。何事にも献身的になるには、自分を無にし努力を惜しまず対応すれば、何事にも優るものなしと感じ、肝に銘じています。

石　丸　健　子

カンカンデンデン・カンデンデン、壬生狂言の舞台や鐘楼がある壬生寺さんの境内が幼い時の遊び場でした。お兄ちゃんの後を金魚の糞の様にくっついて遊んでおりました場所が昔はひっそりとした所でしたのに、昨年は「新撰組」ブームで大変な賑わいで、勇さんもびっくりです。身近な遊び場が歴史的な所だったり、今住んでいる上町台地も歩いてみるとまだまだ新しい発見があります。昨年も第4回「からほりまちアート」が開催されました。地図をもらって探検しています。皆様も今年は来て下さい。

近　藤　信　子

友の会　平成16年度 幹事会

会　長……小村　幸一
副会長……戸田　健治（企画担当幹事長）・相蘇　一弘（博物館副館長）
幹　事……児見山　繁（広報担当幹事長）・阿部　達雄（総務担当幹事長）
　　仲田　昌宏・清水　玉子・石丸　健子・近藤　信子・千倉　康由・原　進
事務局……森　毅・豆谷浩之（博物館学芸員）

編集後記

会員の投票により、会報の愛称が「大阪歴友」に決まりました。これまで2号は「準備号」と称していましたが、新年度からは新しい愛称のもと、本格的なスタートとなります。また、会誌の内容も、これまでは幹事と事務局からの執筆が中心でしたが、できるだけ一般の会員からの文章を掲載していけるようにと考えています。

その第1弾と言うわけではありませんが、すでにご案内しているように、次号は「戦後60年」に関する投稿を載せる予定です。友の会と会報がよりいっそう充実するように、これからもご支援をお願いいたします。（事務局・まめ）

●大阪歴史博物館　友の会だより　準備号No.2
平成17年3月31日発行
●編集・発行　大阪歴史博物館友の会
〒540-0008 大阪市中央区大手前4-1-32